

国際文化会館の歩み 63

2017年4月—2018年3月



公益財団法人 国際文化会館
International House of Japan



目 次

はしがき	4	アーカイブ基盤整備事業	30
プログラム活動	6	リーディングセッション	30
Ⅰ. 知的対話プログラム	6	書籍小展示	31
アジア・リーダーシップ・フェロー・		Ⅵ. 協力・後援事業	31
プログラム(ALFP)	6	協力	31
牛場記念フェローシップ	7	後援	31
日印対話プログラム	8	組織運営の概況	32
日米国際金融シンポジウム	9	Ⅰ. 法人組織関連事項	32
Ⅱ. 人材育成プログラム	10	理事会・評議員会	32
教育プログラム	10	役員関連事項	32
新渡戸国際塾	10	委員会関連事項	32
海外諸団体との連携・協力プログラム	13	職員関連事項	32
日米芸術家交換プログラム	13	庶務関連事項	33
Ⅲ. パブリック・プログラム	16	その他	33
講演・シンポジウム	16	Ⅱ. 募金活動	34
Architalk～建築を通して世界をみる	16	助成金・寄付金	34
アイハウス・レクチャー	17	Ⅲ. 会員	34
日本理解プログラム	18	個人会員	34
Delve into Japanese Culture @I-House	18	法人会員	35
IUCレクチャー・シリーズ	19	優待会員	35
日文研・アイハウス連携フォーラム	20	図書会員	35
特別プログラム	21	会員晩餐会	35
アジア・パシフィック・ヤング・リーダーズ・		新入会員懇親会	36
プログラム(APYLP)	21	Ⅳ. 施設関連事項	36
特別シンポジウム		Ⅴ. 施設運営・サービス活動	36
「グローバル時代の民主主義を考える」	24	Ⅵ. 財政	38
Dance New Air 2018 プレ公演	24	会員関係付表	39
出版	25	個人会員国籍別統計	39
公益信託長銀国際ライブラリー	25	会員比率	41
アイハウス・プレス	25	法人会員一覧	42
定期・不定期刊行物	26	財務諸表	44
Ⅳ. 調査研究プロジェクト	27	理事・監事・評議員	49
外交問題夕食懇談会	27	職員	51
Ⅴ. 図書室	28	組織図	52
利用状況と蔵書管理	28		

はしがき

2017年は、米国のトランプ政権が始動し、米朝間をはじめとした東アジアにおける緊張感が高まると同時に、世界的にテロが多発し、シリア内戦の悪化や60万人以上に達したロヒンギャ難民にも世界の注目が集まる激動の年でした。その一方で、日本では将棋やスポーツの世界において、またアメリカでは銃規制に関わる運動の中で、若い人たちのパワーと活躍が目立つ一年だったようです。そのような中、国際文化会館では人物交流事業の中核となるアジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム(ALFP)や新渡戸国際塾、日米芸術家交換プログラムなどにて、引き続き国内外の若手リーダーや関係者の交流を促進するための場を提供し、またアイハウス・レクチャーや日文研・アイハウス連携フォーラムなどでは、国内外の多彩な講師をお招きして講演会を実施してまいりました。

2016年度に立ち上げた「Architalk～建築を通して世界を見る」では、引き続き世界で活躍する日本の建築家をお招きしました。このシリーズでは、日頃接する機会のない世界的な建築家との交流の場を設けるなどしており、学生などの若い世代の参加も多いプログラムです。2017年度はさらに、国際文化会館をはじめとする近代建築をめぐるツアーを実施したことで、取り壊しを余儀なくされ

ることの多い近代建築を見直すきっかけとなりました。また日印対話プログラムでは、インドで新たな開発支援モデルを構築したアンシュ・グプタ氏がフェローとして来日し、モノが溢れ、経済成長ばかりを追い求める現代社会に対して警鐘を鳴らしました。貧困や地域格差、環境問題についてはインドに留まらず、世界中で取り組んで行かなければならないとし、「まずは行動すること」の大切さを日本にいる若者たちに伝えていただきました。

1998年以降、日米の金融関係者の信頼関係構築に寄与してきた日米国際金融シンポジウムも、20周年を迎えるまでになりました。世界を揺るがす金融課題について日米の関係者が本音で議論し、そこで深めた相互理解と信頼が、今後も金融の分野に留まらず国際社会において役に立つことを願ってやみません。さらに、年度末には新たにアジア・パシフィック・ヤング・リーダーズ・プログラム(APYLP)を立ち上げました。国際文化会館において若手から中堅のリーダーたちのために実施しているALFPや新渡戸国際塾などと、他団体がアジア太平洋地域を対象に行う類似のリーダー向けプログラムをつなぎ、リーダーたちの横の連携を強め、共に研鑽して課題解決に取り組むための場を創出していくことを目的としています。その

キックオフ・フォーラムに、ジョン・D・ロックフェラー三世の孫であるチャールズ・ロックフェラー氏をお招きして、国際文化会館の創立に尽力されたロックフェラー三世の、戦後のアジア太平洋地域における知的文化交流へのビジョンや関わりについて語っていただきました。またパネル・ディスカッションでは、アジア・ソサエティなどのAPYLP参画団体の代表や、それぞれのリーダー向けプログラムに参加したフェローをパネリストにお迎えし、同地域で若手リーダーが取り組むべき課題などについて議論が行われました。今後は、参画団体とともにテーマを決めて、年数回のジョイント・セッションを国内外で開催する予定です。

図書室では、蔵書の朗読・解説を行うリーディングセッションにおいて、大正期版画の収集家であり、オペラやクラシック音楽のパトロンとして著名なエリス・ウェッセルス氏と、アムステルダム国立美術館の日本美術担当学芸員であるマライエ・ヤンセン氏に、日本の版画の歴史や、ウェッセルス氏の収集した版画コレクションなどについてお話しいただきました。また、国際文化会館の所蔵するさまざまな未整理資料の活用を目的として、アーカイブ基盤整備事業を3カ年計画(2017～2019年度)で開始し、初年度である2017年度は、

資料の全容を把握するための状態調査、目録規則の策定、概要目録の作成などを行いました。

定例となりました会員晩餐会では、国際交流基金顧問・日本パラリンピックサポートセンター理事長である小倉和夫氏をお迎えし、「国際交流と非言語コミュニケーション」と題した興味深いお話を伺いました。また「六本木五丁目西地区市街地再開発計画」につきましては、今後も近隣の方々との意見交換および情報収集に努め、国際文化会館としても対応を検討するための専門委員会ならびに作業部会を適宜開催し、引き続き国際文化会館と直接関係のある計画の進展については、随時会員の皆様にもご報告させていただく予定です。

4年後の設立70周年に向けて、国際文化会館は世界と日本の人々の理解を進めるためのさまざまなプログラム活動を地道に続け、とりわけアジア諸国とのさらなる信頼関係構築に向けて、文化交流・人物交流を推進してまいります。また同時に、会員の皆様をはじめ多くの方々にご満足いただけますよう、施設やサービスの維持・向上に向けて、独自性・公益性をさらに強化する努力を続けてまいります。引き続き、温かいご支援とご理解を賜りますよう、お願い申し上げます。

2018年9月

理事長 明石 康

プログラム活動

I. 知的対話プログラム

アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム(ALFP)

1996年度以来、国際交流基金との共催事業として実施してきたアジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム(ALFP)は、2017年度で22年目を迎えました。ALFPでは、毎年日本を含むアジア各国から7～8名のパブリック・インテリゲンチアルが選拔され、フェローとして2カ月間日本でのプログラムに参加しています。プログラム期間中、フェローは国際文化会館で寝食を共にしながら、アジア地域や世界に共通する諸課題について議論します。こうした知的対話を通じてALFPは、地域内ならびにトランスナショナルな理解と協力を促進し、アジアのパブリック・インテリゲンチアルおよび日本のカウンターパートとの緊密なネットワークの構築を目指しています。2017年度は、7名のフェローを招聘しました。これまでに、学界、ジャーナリズム、出版、法律、教育、芸術、NGO(非政府組織)、NPO(非営利組織)など、さまざまな専門領



セミナー

域のフェロー131名が選ばれています。

2017年度は、「Seeking Our Commons in Asia: How Can We Create Visions for the Future?」という共通テーマのもと、フェローは9月11日から11月2日まで主として国際文化会館に滞在し、日本を拠点とする学者、ジャーナリスト、NGO/NPOリーダーたちとのワークショップ、リソース・セミナー、フィールド・トリップに参加しました。プログラムの最後には公開フォーラムを開催し、共同作業の成果を交えながら、それぞれの専門や国の現状について発表しました。

2017年度に参加したフェローは、以下の通りです。

波多野綾子(日本)／ニューヨーク大学アメリカ・アジア法研究所客員研究員

ファザール・ハリク(パキスタン)／ドーン・メディア・グループリポーター、文化活動家

スディルマン・ナシール(インドネシア)／ハサヌディン大学公衆衛生学部上級講師・研究員

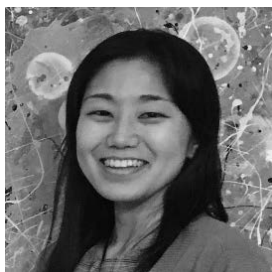
スミタ・バティル(インド)／インディラ・ガンジー国立公開大学(IGNOU)ジェンダー・開発学部助教

ファン・タイン・ドゥック(ベトナム)／銀行学院経営情報システム学部学部長

サロージ・シーサイ(タイ)／ASEAN事務局環境課課長

ワン・シン 王馨(中国)／南京日報マルチメディアセンター副センター長

フェローはプログラム期間中に、高原明生氏(東京大学教授)、マリオ・ロペズ氏(京都大学准教授)、田辺明生氏(東京大学教授)、神武直彦氏(慶應義塾大学准教授)、会田弘継氏(青山学院大



波多野綾子



ファザール・ハリク



スディルマン・ナシール



スミタ・パティル



ファン・ティン・ドゥック



サロージ・シーサイ



王馨

学教授)、アンベス・R・オカンボ氏(アテネオ・デ・マニラ大学准教授、2014年度ALFPフェロー)、黒川清氏(医学博士、政策研究大学院大学名誉教授)、大沢真知子氏(日本女子大学教授)などの国内外の有識者と対話し、NHK、朝日新聞東京本社、社会福祉法人藤雪会などを訪問しました。また、フィールド・トリップとして、

三重県では地域特性を活かした地方創生と防災や、環境の持続可能性と文化の保全について、大阪府では日本の貧困とマイノリティー問題について学ぶ機会を得ました。

牛場記念フェローシップ

現代の複雑化した国際情勢を読み解き、未来を見据える世界的なオピニオン・リーダーを招聘し、グローバル社会が直面する諸課題について意見交換を行うことにより、日本と諸外国との相互理解の増進を試みるプログラムです。フェローは滞日中、公開講演会と専門家を中心としたセミナー、ワークショップなどに講師として参加するほか、各フェローの希望に応じて非公



フィールド・トリップ

開の対談やディスカッションの機会を設定しています。なお本フェローシップは、牛場信彦記念財団の残余財産の寄贈を受けて実施しています。

2017年度は、2018年度以降に招聘するフェローを選出すべく、4名の有識者に運営委員を委嘱し、また国内外の関係者に、フェローの推薦を依頼しました。2018年度前半に、運営委員による選考を行い、今後数年にわたり招聘するフェロー2～3名を選出する予定です。

日印対話プログラム

日印平和条約の締結から60周年を迎えた2012年に、日印両国間に民間レベルの「対話の場」を創出するために立ち上げたプログラムです。本プログラムは、社会のさまざまな課題の解決に向けて、現状を打破するための新しい価値やアイデアを提唱し、またインド国内において影響力のある人物を、政治、経済、文化、学術、科学など幅広い分野から年間1名を選び、1週間程度日本に招聘しています。フェローは滞在中、講演会、関連機関への訪問、地方視察などを通して日本の関係者との意見交換やネットワークの構築を行います。本プログラムは、2016年度まで国際交流基金との共催のもと4名のフェローを招聘し、2017年度からはシャハニ・アソシエイツ株式会社との共催で実施しています。

2017年度は、インドで衣服を用いた独創的な開発支援モデルを構築し、「Clothing Man(衣服

の人)」として広く知られるアンシュ・グプタ氏を招聘しました。グプタ氏は9月3日に来日し、9月10日までの滞在中に国際文化会館での講演のほか、都内のインターナショナル・スクールや大学を訪問し講義を行いました。さらに、新渡戸国際塾の塾生とも意見交換を行いました。

「エコロジカルな支援という革新—インドの貧困問題に挑む」(9月8日)

アンシュ・グプタ／非営利団体 Goonj 創設者

コメンテーター&モデレーター：

近藤正晃ジェームス／一橋大学大学院客員教授、国際文化会館評議員



アンシュ・グプタ



エコロジカルな支援という革新—インドの貧困問題に挑む

日米国際金融シンポジウム

国際文化会館はハーバード・ロースクール国際金融システム・プログラム(PIFS)との共催で、日米国際金融シンポジウムを開催しています。本シンポジウムは、毎年日米交互で開催され、日米両国の政府高官、政治家、金融機関幹部、法律家、コンサルタント、研究者、メディア関係者など100名以上が参加し、2日間にわたって国際金融システムの機能と安定化にかかわる課題について討議を行います。本シンポジウムは、日米双方の金融関連企業・団体や個人からの協賛ならびに参加費により実施しています。



日米国際金融シンポジウム

第20回シンポジウムは、10月21～22日に神奈川県小田原市で開催され、日米から117名が参加し、以下の2つのテーマについて討議しました。

- (1)金融規制の行方：規制緩和、フラグメンテーションとバーゼル体制の崩壊
- (2)金融政策のエクジットをどう乗り切るか：
次の金融危機をもたらす可能性のある原因

また10月19日には、本シンポジウム20周年記念レセプションを国際文化会館にて開催し、これまでの参加者や関係者126名が出席しました。



20周年記念レセプション

Ⅱ. 人材育成プログラム

教育プログラム

新渡戸国際塾

新渡戸国際塾は、企業、NGO／NPO、官公庁、研究機関などの若手・中堅の社会人を対象に、国内外の国際的な現場で活躍できる人材の育成を目的として、2008年度から実施しているもので、2017年度に第十期を迎えました。これまでに143名が塾生として参加し、修了生ネットワークを形成しています。塾長は明石康(国際文化会館理事長)、コーディネーターは渡辺靖氏(慶應義塾大学教授)が務めています。

第十期は「揺らぐ国際秩序—来るべき世界の枠組み」をテーマに、6月から12月まで全14回の講義を行い、そのうち4回を一般に公開しました。塾生には、書類審査(願書・小論文)と面接審査を経て、官公庁、企業(商社、メーカー、コンサルティングなど)のほかにも医師や研究者、映画関係者など16名(平均年齢32歳)が選拔されました。



討議の様子

本プログラムは、公益財団法人渋沢栄一記念財団と一般財団法人MRAハウスの助成を受けて実施しています。

2017年度のカリキュラムは、以下の通りです。

開講式・オリエンテーション(6月17日)

「ステークホルダー資本主義—原点から学ぶ」 (7月1日)

渋澤 健／コモンズ投信株式会社取締役会長、
公益財団法人渋沢栄一記念財団業務執行理事



渋澤 健

鯖江スタディ・ツアー事前勉強会(7月15日)

木村共宏／福井県鯖江市地域おこし協力隊員、
新渡戸国際塾四期生



鯖江スタディ・ツアー事前勉強会

鯖江スタディ・ツアー(7月22～23日)
「人は城、人は石垣、人は堀―信玄に学ぶ牧野流
“国づくり”」
牧野百男／福井県鯖江市長



牧野百男

「新たな地域産業を育てる―眼鏡から医療器具へ
の進出」
堀川 馨／株式会社シャルマン会長



堀川 馨

「SAKEの無限の可能性を信じて―日本酒未開地
への挑戦」
加藤團秀／有限会社加藤吉平商店第11代当主



加藤團秀

「地域と共にある地域企業の在り方」
高野利明／株式会社ヤマト工業社長



高野利明

「『作る』から『創る』へ―地元の愛を礎に世界へ」
西村昭宏／株式会社西村金属常務取締役、株式
会社西村プレシジョン代表



西村昭宏

「『民主主義』とは何か」(公開)(8月5日)
佐伯啓思／京都大学名誉教授



佐伯啓思

塾長との討議(8月26日)

明石 康／新渡戸国際塾塾長



明石 康

「インドの貧困問題に取り組む」(9月9日)

アンシュ・グプタ／非営利団体 Goonj 創設者



アンシュ・グプタ

研修合宿(9月23～24日)

於：清泉寮(山梨県北杜市)

「私たちが描く2030年のシナリオ」

渡辺 靖／慶應義塾大学教授

千野 境子／産経新聞客員論説委員



渡辺 靖



千野 境子

塾生のための非公開討議(10月7日)

**アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム
(ALFP)フェロー、マンスフィールドフェローおよ
びカケハシ・プロジェクトフェローとの対話
(10月15日)**

「記憶と忘却：文化遺産と第二次世界大戦」

アンベス・R・オカンボ／アテネオ・デ・マニ
ラ大学准教授



ALFPフェロー、マンスフィールドフェローおよびカケハシ・プロジェクトフェロー



アンベス・R・オカンボ

「自由と平和を追い求めたシリアの『理想』と『現実』」(公開)(10月28日)

ナジーブ・エルカシュ／リサーラ・メディア代表



ナジーブ・エルカシュ

「伝統から未来へ—能×現代音楽で世界を拓く」
(公開)(11月4日)

青木涼子／能×現代音楽アーティスト



青木涼子

「智慧がもたらす希望の扉—次世代が築く新たな日中関係」(公開)(11月18日)

毛丹青(マオ・タンチン)／神戸国際大学教授



毛丹青

修了式(12月2日)



修了式

海外諸団体との連携・協力プログラム

日米芸術家交換プログラム (共催：日米友好基金)

米国の芸術家5名が来日し、3～5カ月間、日本の文化・芸術を研究し、創作活動を行ったり、日本の芸術家と交流を深めたりするプログラムです。日米友好基金(Japan-United States Friendship Commission)が主催し、国際文化会館は滞日中のフェローの活動をサポートしています。1978年より実施され、専門スタッフが来日時のオリエンテーションや住居の手配、日本人芸術家や関連団体などへの紹介、情報の提供や通訳など、フェローの活動全般をサポートしています。

2017年度に来日したアーティストは、以下の通りです。

エレーン・バックホルツ／美術作家

(6月から5カ月)

ジェイミ・ナカムラ・リン／作家(3月から4カ月)

キミ・マエダ／舞台芸術家(7月から5カ月)

クウィン・ヴァンツー／建築家(12月から5カ月)

ヴァネッサ・ヴォスキール／振付家(4月から3カ月)



エレーン・バックホルツ



ジェイミ・ナカムラ・リン



キミ・マエダ



クウィン・ヴァンツー



ヴァネッサ・ヴォスキール

また、滞日中の米国人芸術家の活動や、彼らと日本人芸術家がコラボレーションする際の発表の場として、「IHJアーティスト・フォーラム」(助成：日米友好基金)を不定期に開催しています。

2017年度に開催したアーティスト・フォーラムは、以下の通りです。

リーディング「炎上と逃走のあいだ」(4月13日)

スピーカー：ジェイミ・ナカムラ・リン



炎上と逃走のあいだ

映画上映『カクテル・パーティー』(6月23日)

スピーカー：レジー・ライフ／映画監督、1990
年度日米芸術家交換プログラム
フェロー

モデレーター：マーク・シリリング／映画評論家



『カクテル・パーティー』上映会

**アーティスト・トーク「生きた色彩で夜を紡ぐ：
エレーン・バックホルツの光のインスタレーション」**(7月7日)

スピーカー：エレーン・バックホルツ

ゲストスピーカー：藤本隆行／美術家、照明
アーティスト
フロー・ヴァン・デ・ヴェ
ルデ／美術家、教育者、作
曲家



生きた色彩で夜を紡ぐ：エレーン・バックホルツの光のインスタレーション

体験型パフォーマンス「光学的庭園ツアー」
(8月3日)

アーティスト：エレーン・バックホルツ

ゲスト：フロー・ヴァン・デ・ヴェルデ



光学的庭園ツアー

ソロパフォーマンス『Bend』(10月25日)

作・出演：キミ・マエダ



『Bend』

**アーティスト・トーク「内と外：入り口の文化
と空間体験について」**(12月19日)

スピーカー：クウイン・ヴァンツー



内と外：入り口の文化と空間体験について

Ⅲ. パブリック・プログラム

講演・シンポジウム

Architalk〜建築を通して世界をみる

日本近代建築の巨匠三氏(坂倉準三、前川國男、吉村順三)によって共同設計された国際文化会館には、創立当初から現在まで日本の建築界を牽引してきた建築家や建築関係者が会員として多数在籍しているほか、海外からも建築関係者が多数来館します。これらのネットワークを活かし、国際文化会館の建物再生10周年となる2016年より国内外で活躍する建築家を招き、建築を通して現代世界について考えるためのプログラムを開始しました。本プログラムでは、講演会終了後に懇親会を開催し、講師や参加者同士が懇談する機会を設けています。

2017年度は、小林正美氏(明治大学副学長)、藤村龍至氏(東京藝術大学准教授)をコーディネーターに迎え、以下のプログラムを開催しました。また森ビル株式会社、清水建設株式会社、株式会社天童木工、株式会社西原衛生工業所、株式会社三菱地所設計の5社より協賛をいただきました。



小林正美



藤村龍至

「都市—記号の海にうかぶくしま」(11月8日)
磯崎 新／建築家



磯崎 新

「環境と建築」(12月4日)
妹島和世／建築家



妹島和世

「Archaeology of the Future」(2018年2月16日)
田根 剛／建築家



田根 剛

《番外編》パネル・ディスカッション&ツアー
「近代建築が問いかけるもの」(9月6日)

青木 淳／建築家

鯨坂 徹／鹿児島大学教授

松隈 洋／京都工芸繊維大学教授



青木 淳



鯨坂 徹



松隈 洋

アイハウス・レクチャー

本プログラムは、各分野の第一線で活躍中の専門家を講師に迎え、タイムリーな世界情勢や、諸外国との比較から見えてくる日本社会への示唆について政治、経済、外交、文化などの切り口からお話しいただくものです。いずれの講演も基本的には通訳をつけず、英語または日本語で行っています。

2017年度は、以下の4回の講演会を開催しました。

「SDGsが変える世界—地球規模の課題への新たなアプローチ」(6月13日)*

蟹江憲史／慶應義塾大学大学院教授



蟹江憲史

※2016年度まで実施されていたランチタイム・レクチャーのプログラムを、アイハウス・レクチャーとして開催しました。

「記憶と忘却～日本－フィリピンの関係から」
(10月17日)

アンベス・R・オカンボ／アテネオ・デ・マニラ大学准教授

モデレーター：藤原帰一／東京大学教授



アンベス・R・オカンボ

「インターネット時代の中国ポピュリズム」

(2018年2月6日)

阿古智子／東京大学大学院准教授



阿古智子

「『翻訳』という生き方—森嶋外」(2018年3月16日)

長島要一／コペンハーゲン大学DNP特任名誉教授



長島要一

日本理解プログラム

Delve into Japanese Culture @I-House

滞日外国人や海外から会館を訪れる方々を対象に、さまざまな切り口から日本文化に対する理解を深めていく講座です。同時に、日本人の方々にも日本文化に対する新たな発見の機会を提供しています。2016年度まで(有)Kisako Intercultural Instituteとの共催で実施し、2017年度からは国際文化会館の単独主催により、年3~4回程度の講座を開催しています。

2017年度は、以下の4回の講座を開催しました。

「Canadian Rakugo Storyteller Katsura Sunshine Talks About the Charms of Rakugo 桂三輝が語る、『落語』と『RAKUGO』」(6月28日)

桂 三輝／落語家



桂 三輝

「Reading the Japanese Mind Through Waka Poetry with a Focus on *The Tale of Genji* 和歌に表れる日本の心～『源氏物語』を中心に」

(10月2日)

ツベタナ・クリステワ／国際基督教大学教授



ツベタナ・クリステワ

「The Long-standing Liaison Between Sumo and the Media 相撲とメディアの長～い付き合い」(11月24日)

リー・トンプソン／早稲田大学教授



リー・トンプソン

「*Dashi and Umami in Japanese Cuisine* 日本料理の魅力—伝承と追求—」(2018年2月14日)

柳原尚之／江戸懐石近茶流嗣家



柳原尚之

IUCレクチャー・シリーズ

本シリーズは、日本研究者の研究成果を一般の方々に広く公開し、また将来の日本研究者と、すでに活躍中の日本研究者とのネットワーキングを図ることを目的に、2014年度よりアメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(IUC)、国際文化会館、日本財団の共催事業として実施しています。IUCは主に北米の大学生・大学院生を対象に、中・上級日本語の集中教育を行う日本語教育・研究機関で、卒業生の多くが日本に関わる幅広い分野で研究者、政府関係者、実業家などとして活躍しています。こうした卒業生を講師に迎え、日本語による講演会を開催しています。

2017年度は、以下の2回の講演会を開催しました。

「スタンフォード大学におけるマインドフルネス教育」(5月31日)

スティーヴン・マーフィ重松／心理学者、スタンフォード大学



スティーヴン・マーフィ重松

「『伝統』の息吹一能からアニメまで」(12月1日)

ジェリー・ヨコタ／大阪大学大学院教授



ジェリー・ヨコタ

日文研・アイハウス連携フォーラム

京都を拠点に、日本の文化・歴史を国際的な連携・協力の下で研究するとともに、外国の日本研究者を支援している国際日本文化研究センター(日文研)と国際文化会館の共同プログラムとして2014年度に開始しました。年4回程度、日文研の専任・客員研究員を講師とした講演会を国際文化会館で実施することにより、日本研究の最前線を紹介し、日本理解の促進を目指しています。基本的には通訳をつけず、英語または日本語で行っています。

2017年度は、以下の3回の講演会を開催しました。

「谷川道雄の中国史研究から日中の未来を考えるー文化交流と学術思想」(7月4日)

李済滄(リー・ジーツァン)／南京師範大学准教授、日文研外国人研究員

コメンテーター：劉岸偉(リウ・アンウェイ)／
東京工業大学教授
伊東貴之／日文研・総合研究
大学院大学教授



李済滄

「オーナメンタル・ディプロマシー：明治天皇と近代日本の外交」(12月8日)

ジョン・グリーン／日文研教授

コメンテーター：サーラ・スヴェン／上智大学
教授



ジョン・グリーン

「光源氏と〈二人の父〉という宿命—ブツダの伝記が照らし出す『源氏物語』の視界—」

(2018年1月30日)

荒木 浩／日文研教授

コメンテーター：ゲイ・ローリー／早稲田大学
教授



荒木 浩

特別プログラム

アジア・パシフィック・ヤング・
リーダーズ・プログラム(APYLP)

アジア・パシフィック・ヤング・リーダーズ・プログラム(APYLP)は、向こう数十年にわたりアジア太平洋地域の平和と繁栄を担っていく次世代のためのコミュニティー構築を目的に、創設されたプログラムです。2030年までに、アジア太平洋諸国のGDPは世界全体の3分の2以上を占めることが予測される中で、域内のさまざまなリーダーシップ・プログラムのフェローをつなぎ、継続的な研鑽の機会を提供することで、新たな取り組みを生み出し、こうした次世代コミュニティーの活動の拠点となる「場」を提供します。2018年度より活動の柱として、APYLP参画団体が中心となって年数回のジョイント・セッションを、日本をはじめアジア太平洋地域の各地で開催します。

2017年度は、そのキックオフとしてフォーラムを開催しました。1950～60年代にかけてアジア太平洋地域内の相互理解を促進するために、国際文化会館を含むさまざまな団体の設立に関わったジョン・D・ロックフェラー三世の功績を振り返るとともに、これからのアジア太平洋地域に必要な知的交流・文化交流のあり方や若手リーダー間の対話の意義などについて、議論が交わされました。

キックオフ・フォーラム(2018年3月31日)

概要説明

近藤正晃ジェームス／一橋大学大学院客員教授、
国際文化会館評議員



近藤正晃ジェームス

記念講演

チャールズ・ロックフェラー／アジア・ソサエティ
評議員、ジョン・D・ロックフェラー三世孫



チャールズ・ロックフェラー



キックオフ・フォーラム

パネル・ディスカッション1

「アジア太平洋地域の課題と知的交流・文化交流
の役割」

パネリスト：

シンシア・パウティスタ／ラモン・マグ
サイサイ賞財団理事

ロナ・チャオ／百賢亞洲研究院CEO

フランク・ジャヌージ／モーリー・ン &
マイク・マンズフィールド財団理事長兼
CEO

ダニエル・ラッセル／アジア・ソサエティ
政策研究所シニア・フェロー

渡辺 靖／慶應義塾大学教授、国際文化会
館評議員

司会：道傳愛子／NHK国際放送局チーフ・プロ
デューサー



シンシア・パウティスタ



ロナ・チャオ



フランク・ジャヌージ



ダニエル・ラッセル



渡辺 靖



道傳愛子



小林りん



エイミー・ジャクソン

パネル・ディスカッション2

「次世代が考えるアジア太平洋の未来」

ゲストスピーカー：

小林りん／ユナイテッド・ワールド・
カレッジISAKジャパン代表理事

パネリスト：

エイミー・ジャクソン／マンズフィールド・
フェローシップ・プログラム

李源宰(イ・ウォンジエ)／アジア・リー
ダーシップ・フェロー・プログラム

大橋英雄／新渡戸国際塾、日米リーダ
ーシップ・プログラム

司会：長尾俊介／ホワイトスター・キャピタル
ベンチャー・パートナー



李源宰



大橋英雄



長尾俊介

特別シンポジウム 「グローバル時代の民主主義を考える」

近年の自由民主主義国においては、民主的選挙を通して有権者のニーズを反映した問題解決は不可能なのではないかという、民主主義制度の正統性に対する根源的な不信感が広がりを見せています。こうした中、渋沢栄一記念財団およびサントリー文化財団との共催で特別シンポジウムを実施しました。本シンポジウムでは、米国、英国、韓国、日本などの事例をもとに、民主主義制度の正統性について理論と実証の両面から議論されました。

「グローバル時代の民主主義を考える」 (12月14日)

基調講演：メリサ・ウィリアムズ／トロント大学教授

パネリスト：石川涼子／立命館大学准教授
待鳥聡史／京都大学教授
金英敏(キム・ヨンミン)／ソウル大学教授

司会：田中愛治／早稲田大学教授



グローバル時代の民主主義を考える

Dance New Air 2018 プレ公演

オリンピック文化プログラムbeyond2020認定を受けた国際ダンスフェスティバルの「Dance New Air」と、コンテンポラリーダンス公演を共催しました。岩崎小彌太記念ホールを中心に、屋上や階段の空間にインスタレーションを施し、ダンスを通して国際文化会館を再発見するサイトスペシフィックな作品となりました。

サイトスペシフィックシリーズVol. 2

『enchaine』(2018年2月28日～3月2日、6公演)

振付・演出・出演：湯浅永麻

出演：アラン・ファリエリ

ジェームズ・ヴ・アン・ファン

空間：田根 剛 (Atelier Tsuyoshi Tane Architects)

衣裳：廣川玉枝 (SOMA DESIGN)

技術：遠藤 豊 (LUFTZUG)

主催：Dance New Air実行委員会、一般社団法人ダンス・ニッポン・アソシエーツ

共催：港区(平成29年度港区文化プログラム連携事業)

助成：アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)



『enchaine』

出版

公益信託長銀国際ライブラリー

2000年7月に設置された「公益信託長銀国際ライブラリー基金」の事業で、前身である長銀国際ライブラリー財団の残余財産を基金として国際文化会館が事業を継承しています。政治・経済・社会・文化などの日本人著作を毎年2冊選定し、英訳・刊行して広く国内外に配布し、国際社会の中での日本理解の増進に資することを目的としています。

2017年度は、2016年度に選定された長銀国際ライブラリー叢書 No. 40と、未完成であった No. 10の2冊を英訳・刊行しました。これらの2タイトルは、国内外の大学図書館、研究機関、公共図書館、文化施設など、海外2,800カ所、国内700カ所へ無償配布されました。

この2冊の刊行・配布をもって、公益信託長銀国際ライブラリー基金事業は終了しました。

The Lancashire Cotton Industry and Its Rivals by

Heita Kawakatsu

翻訳兼編集者：Jean Connell Hoff

川勝平太著『日本文明と近代西洋―「鎖国」再考』(日本放送出版協会、1991年刊)を全面改編して刊行



(注)本書は、旧長銀国際ライブラリー財団が刊行を決定し、著者との間に出版の合意がなされていましたが、同財団の解散(2000年)に際して、同事業の継承先を国際文化会館に決定し、同事業の仕掛品であった本書の

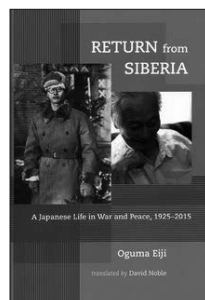
刊行・配布をその費用とともに、国際文化会館へ委託されたものです。

Return from Siberia: A Japanese Life in War and Peace, 1925–2015 by

Oguma Eiji

翻訳者：David Noble

小熊英二著『生きて帰ってきた男―ある日本兵の戦争と戦後』(岩波書店、2015年刊)の英語版



アイハウス・プレス

2006年より、出版メディアを通して、国際文化会館のプログラム活動の成果を広く一般に発信するとともに、海外における日本理解の増進を目的に、日本人による名著を英訳・刊行して発信する活動を実施しています。

2017年度は、以下の1冊の書籍を刊行し、国内外の出版マーケットで販売しました。

『変容する世界とリーダーシップ』新渡戸国際塾講義録5
国際文化会館新渡戸国際塾編



定期・不定期刊行物

2017年度は、年4回発行の広報誌『I-House Quarterly』(A4版／16ページ、和英併記)を14～17号まで発行し、各界で活躍する方へのインタビューや対談記事、実施した講演のレポートを掲載したほか、今後のプログラムや施設イベントなどを紹介しました。会館を知らない層、とりわけ国際問題や文化交流に関心のある若い世代に訴求すべく、各国際機関やメディアなどの通常の配布ルート以外に、関連イベントや大学、書店などでも積極的に配布しました。通常の発行部数は6,500部です。なお、これまで会員向けに『国際文化会館会報』および『IHJ Bulletin』で掲載してきた講演録は、会員専用のウェブサイトへ移行し、継続的に掲載しています。

また、各年度の事業内容をまとめた年次報告書(『国際文化会館の歩み』、『Annual Report』)を会員および関係機関に配布しました。

2017年度の刊行物は、以下の通りです。

- 英文年次報告書『Annual Report 62』
(2016年度事業報告、9月発行)
- 和文年次報告書『国際文化会館の歩み 62』
(2016年度事業報告、9月発行)

- 『I-House Quarterly』No. 14,
Summer 2017(6月発行)
インタビュー：
アナ・トストエス／DOCO-
MOMO International会長
エッセー：
ピート・テオ／音楽家、映画監督 ほか



- 『I-House Quarterly』No. 15,
Fall 2017(9月発行)

インタビュー：
藤井 光／アメリカ文学者、
翻訳家
エッセー：
小池一夫／漫画原作者、小説家 ほか



- 『I-House Quarterly』No. 16,
Winter 2018(12月発行)

対談：
アンシュ・グプタ／社会起業家×古賀義章／講談社インド事業担当
エッセー：
バーバラ・ルーシュ／コロンビア大学名誉教授 ほか



- 『I-House Quarterly』No. 17,
Spring 2018
(2018年3月発行)

インタビュー：
土井香苗／ヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表
エッセー：
ケント・カルダー／ジョンズ・ホプキンス大学教授 ほか



Ⅳ. 調査研究プロジェクト

外交問題夕食懇談会

外交問題に関心の深い方々を対象に、ゲストスピーカーを囲んでインフォーマルな雰囲気の中で懇談する機会を提供するものです。調査研究プロジェクトとして行っており、得られた成果を他のプログラムの参考にするため、参加者は学者・研究者、外交実務経験者、NPO、シンクタンク、メディア、経済人など、職種や専門を超えて、異なる分野から少人数に限定しています。使用言語は日本語または英語です。

2017年度は、以下の懇談会を開催しました。

第30回

「トランプ外交の評価―無原則と柔軟性の間」

(6月12日)

久保文明／東京大学大学院教授



久保文明

第31回

「第19回共産党大会を控えた中国内外の情勢」

(9月4日)

宮本雄二／元駐中国特命全権大使



宮本雄二

第32回

「北朝鮮問題から見た東アジア情勢」

(2018年3月15日)

添谷芳秀／慶應義塾大学教授

ディスカッサント：

李鍾元(リー・ジョンウォン)／早稲田大学大学院教授



添谷芳秀

V. 図 書 室

国際文化会館の図書室は創設以来、日本理解を促す学術交流を活動の柱として、社会科学・人文科学の領域における日本研究、国際事情および東アジア事情に関する英文資料を主として収集しており、図書約27,000冊と雑誌約400タイトルを所蔵しています。さまざまな国籍の日本研究者、日本専門家、外交専門家、学者、芸術家、ジャーナリスト、著述業の来館者(会員、図書会員、会館滞在者、または他図書館からの紹介による利用者など)のための、知識交流・知識創出の場としての役割を果たしています。来館者に対して、きめ細かな資料・情報・機関・人物の紹介を行うことを特色としています。また日本研究専門図書室として、日本研究の支援に関する事業も行っています。

利用状況と蔵書管理

2017年度の利用状況は、前年度と比較して来館者はほぼ同数でしたが、貸出(40%)・レファレンス(10%)は増加しました。利用者から受ける質問の範囲は、著作権許諾取得、文献探索、専門機関や専門家の紹介、調査への助言など多岐にわたり、多様なニーズに対して最適な情報を提供するように努めています。蔵書管理においては、書架スペース確保のため前年度に引き続き除籍冊数を増やしました。

	2016年度	2017年度
蔵書		
図書 (冊)	27,470	27,360
雑誌タイトル (種)	390	389
受入図書 (冊)	329	462
購入	127	116
寄贈	202	346
受入雑誌 (冊)	2,543	2,447
除籍図書 (冊)	339	572
開室日数 (日)	292	292
来館者 (人)	10,482	10,460
日本人	6,923	6,829
外国人	3,559	3,631
貸出 (冊)	1,199	1,663
図書館間貸出 (件)	132	144
依頼	72	87
受付	60	57
レファレンス (件)	954	1,066
来館	534	652
電話	24	51
手紙・ファックス	0	1
電子メール	396	362
パソコン利用者 (人)	596	606
図書会員 (人)	131	124
入会	33	22
退会	37	29

(2018年3月31日現在)

アーカイブ基盤整備事業

国際文化会館には写真、書簡を含む文書、各事業の記録など、戦後の文化交流史を語る一次資料が多数保管されています。これらの資料の活用を可能にし、総合的な基礎目録をインターネット上で公開することを目的として、3カ年計画（2017～2019年度）で本事業を開始しました。初年度である2017年度は、事業に関する討議・助言を行うアーカイブ基盤整備委員会を発足させ、同委員会の指導のもと、資料の全容を把握するための実態調査、目録規則の策定、概要目録の作成などを実施しました。

リーディングセッション

図書室蔵書の朗読と解説を通して、参加者がスピーカーと対話し、交流する機会の創出を目指して開催しています。毎回多くの参加者があり、図書室広報の役目も果たしています。

2017年度は、以下のセッションを開催しました。

「エリス・ウェッセルス氏とマライエ・ヤンセン氏による『Japan: Modern—Japanese Prints from the Elise Wessels Collection』リーディングセッション」(11月22日)

エリス・ウェッセルス／Nihon no Hanga美術館ディレクター

マライエ・ヤンセン／アムステルダム国立美術館学芸員



エリス・ウェッセルス



マライエ・ヤンセン



リーディングセッション

書籍小展示

本小展示は日仏会館図書室、ドイツ日本研究所図書室と共催で行ったもので、同じテーマについて国際文化会館では英語の資料、日仏会館ではフランス語の資料、ドイツ日本研究所図書室ではドイツ語の資料を展示しました。

「没・90年 芥川龍之介」(10月3日～31日)

「歌舞伎・文楽」(2018年3月1日～30日)



書籍小展示

Ⅵ. 協力・後援事業

2017年度、国際文化会館は以下の事業への協力・後援を行いました。

協 力

公開シンポジウム「英語を使い未来に活路を開く」(10月10日)

主催：一般社団法人日本英語交流連盟

会場：国際文化会館

Innovative City Forum 2017「都市とライフスタイルの未来を描く」(10月12～14日)

主催：アカデミーヒルズ、一般財団法人森記念財団都市戦略研究所、森美術館

会場：六本木アカデミーヒルズ

公開シンポジウム「未来のリーダーを育てるアメリカのリベラルアーツ・カレッジ」(2018年3月7日)

主催：公益財団法人グルー・バンクロフト基金

会場：国際文化会館

後 援

公開シンポジウム「増大する地政学的リスクの見通しとその処方箋～『ニューノーマル時代』をどのように生きるか」(7月11日)

主催：一般財団法人国際経済交流財団

会場：国際文化会館

学術シンポジウム「グローバル時代の『普遍』をめざして―『帰一協会』の挑戦と渋沢栄一」(2018年3月6日)

主催：公益財団法人渋沢栄一記念財団

会場：国際文化会館

組織運営の概況

I. 法人組織関連事項

理事会・評議員会

2017年度中の理事会・評議員会の開催は、以下の通りです。

2017年度第1回理事会	6月1日開催
同 第2回理事会	6月16日開催
同 第3回理事会	2018年1月18日開催
同 第4回理事会	2018年3月15日開催

2017年度定時評議員会 6月16日開催

役員関連事項

2017年度中の評議員、監事、理事等の異動は、以下の通りです。

【監 事】(6月16日付)

(新任) 手塚正彦
(退任) 宮尾舜助

【理 事】

(重任) 岩下 幹(6月16日付)
(新任) 丸山 勇(6月16日付)
(死去) 原田明夫(4月6日)

【代表理事】(6月16日付)

(新任) 番場孝司(常務理事)
(退任) 降旗高司郎(常務理事)

【業務執行理事】(6月16日付)

(新任) 丸山 勇(常勤理事)
(退任) 番場孝司(常勤理事)

年度末現在、評議員19名、監事2名、理事12名の体制です。

委員会関連事項

2017年度中の各委員会の開催は、以下の通りです。

【役員等候補者選出委員会】

2017年度第1回委員会	4月4日開催
同 第2回委員会	5月12日開催
同 第3回委員会	2018年2月27日開催
同 第4回委員会	2018年3月20日開催

【会員制度検討委員会】

2017年度第1回委員会	4月24日開催
同 第2回委員会	5月23日開催
同 第3回委員会	6月20日開催
同 第4回委員会	7月28日開催
同 第5回委員会	9月5日開催
同 第6回委員会	10月19日開催

【六本木五丁目西地区市街地再開発検討委員会】

2017年度第1回委員会	4月13日開催
同 第2回委員会	5月29日開催

職員関連事項

2017年度中、新規採用者は無く、2名が退職しました。年度末現在の職員数は、有期職員を含む23名(男性6名、女性17名)の体制です。

庶務関連事項

六本木五丁目西地区市街地再開発準備組合

地区住民・地権者の協議機関である「六本木五丁目西地区市街地再開発準備組合」に、国際文化会館は同組合の副理事長として参加しており、この地区の将来に向けた新しい町づくりについて検討、意見交換を行っています。近隣の方々と協調して、この地区の歴史、文化および緑の環境を守ることを念頭に、より良い町づくりに努めています。

その他

アジア・ソサエティとの戦略的パートナーシップ

2018年3月30日、米国の民間非営利団体であるアジア・ソサエティ (Asia Society) との間で戦略的パートナーシップ協定を締結しました。国際文化会館からは明石康(理事長)が、アジア・ソサエティからはジョゼッタ・シーラン理事長の代理としてトム・ナゴルスキー副理事長とチャールズ・ロックフェラー理事が協定書に署名しました。

アジア・ソサエティは、米国とアジア地域の人々の相互理解を目的として、1956年にジョン・D・ロックフェラー三世によって創設され、

ニューヨークに本部があるほか、米国内ではサンフランシスコ、ヒューストン、ロサンゼルス、ワシントンD.C.に、国外では上海、香港、マニラ、ムンバイ、シドニー、ソウル、チューリッヒに支部が置かれています。このたびの提携により、アジア・ソサエティは国際文化会館内にジャパン・センターを設置し、日本での活動を本格的に始動させます。

国際文化会館は、これまで以上にアジア・ソサエティと協力し、アジア・パシフィック・ヤング・リーダーズ・プログラム (APYLP) をはじめ、アジア太平洋地域に焦点を当てた各種事業を展開していきます。



調印式 (左から明石 康、チャールズ・ロックフェラー、トム・ナゴルスキー)

Ⅱ．募金活動

助成金・寄付金

2017年度中に領収した助成金・寄付金の合計額は、93,362千円となりました。概要は以下の通りです。（「正味財産増減計算書」参照）

国際交流基金	19,460千円 (千円以下四捨五入)
日米国際金融シンポジウム	13,300
ハーバード・ロースクール	12,480
日米友好基金	5,698
米日財団	5,450
MRAハウス	4,000
渋沢栄一記念財団	2,200
トヨタ財団	1,000
シャハニ・アソシエイツ株式会社	1,000
森ビル株式会社	500
霞会館	300
清水建設株式会社	300
株式会社天童木工	300
株式会社西原衛生工業所	50
株式会社三菱地所設計	50
入会時寄付金	18,950
諸寄付	8,325

Ⅲ．会 員

個人会員

2017年度、176名(日本人137名、日本人以外39名)が入会し、自己都合、死亡等により110名(日本人75名、日本人以外35名)が退会しました。なお制度の廃止により、旧優待会員1名を個人会員に組み入れました。また、国籍変更が3名(日本→米国：2名、インド→米国：1名)ありました。年度末現在の会員数は2,959名(日本人2,118名、日本人以外41カ国・地域841名)となり、前年より67名(日本人60名増、日本人以外7名増)の増加となりました。内訳は、以下の通りです。(2018年3月31日現在)

	日本人	日本人以外	小計	合計
新規入会	137	39		176
旧優待会員		1		1
退会	42	13	55	
死亡	29	8	37	
登録抹消	4	14	18	
国籍変更	－2	＋2		
小計	75	35		110
差引合計	＋60	＋7		＋67

法人会員

2017年度、5法人(7口)が入会し、10法人(14口)が退会および減口した結果、5法人(7口)の減少となり、年度末の法人会員数は170法人(197口)となりました。口数別内訳は、以下の通りです。(2018年3月31日現在)

	法人数	口数	前年度比
4口会員	1	4	-1(-4口)
3口会員	5	15	+2(+6口)
2口会員	14	28	-3(-6口)
1口会員	150	150	-3(-3口)
合 計	170	197	-5(-7口)

優待会員

都内在住の各国大使、国際機構の日本支部の代表などによって構成された優待会員制度は、会員の種類から廃止されていましたが、2017年4月に残っていた1名を個人会員に切り替え、2018年3月31日現在、優待会員は0名となりました。

図書会員

研究調査活動のために、図書室の所蔵資料や情報サービスの利用を希望する研究者を対象とした図書会員制度への登録者数は、本年度22名が入会し、29名が退会したため、年度末現在124名(日本人67名、日本人以外15カ国・地域57名)になりました。

会員晩餐会

11月14日に会員晩餐会を開催し、約80名の会員ならびにご同伴の方々が集いました。今年は特別ゲストに、国際交流基金顧問／日本パラリンピックサポートセンター理事長／青山学院大学特別招聘教授である小倉和夫氏をお迎えし、「国際交流と非言語コミュニケーション」と題して、興味深いお話を伺いました。小倉氏は冒頭に手話でご挨拶をされ、まずは「非言語」の例を示されました。そして世界の要人たちの会談や握手の画像を具体的な例にとり、「時間」「場所」「ジェスチャー」「服装」「食事」「音楽」などが言語によらないコミュニケーションであることをお話しされました。参加者の皆様は、普段気が



小倉和夫



会員晩餐会

付かないおのおのの要素に込められた意味について興味深く聞き入り、有意義なひとときを過ごされました。

新入会員懇親会

国際文化会館の理念・活動・施設をご理解いただくとともに、会員間の親睦を図る場として、2016年6月から2017年5月までと、2017年6月から12月までのそれぞれの期間に新規入会された会員の皆様を対象に、2017年6月27日および2018年2月13日に懇親会を開催しました。

Ⅳ．施設関連事項

2002年に導入した電話交換機の部品生産終了に伴い、交換機の保守延長サポートが終了することから、新規機種への更新工事を2018年1月28日に行われた定期点検時(全館停電)に実施しました。また、地下1階用空調機に経年劣化による不具合が発生したため、エンジン等の主要部の交換工事を2018年3月13日に実施しました。

Ⅴ．施設運営・サービス活動

国際文化会館は、自らの企画の実施や会員をはじめとする国際交流、文化活動に従事する方々のひろばとして供するための施設を有しています。施設の内容は大別すると、国内外の知識人・文化人に利用されている宿泊施設と国際文化交流のための会合施設、そして飲食施設から成り立っています。研究個室(宿泊施設／全44室)は庭園に面しており(西館の一部を除く)、四季折々の美しい自然は多くの利用者より愛されています。

2017年度には、50以上の国と地域から延べ15,193名の宿泊客をお迎えし、このうち外国人の利用が64.8%と、国内外の国際交流関係者、学者、芸術家、文化、知識人の方々が集う施設としての特色をよく発揮しています。

会合施設のうち、別館2階講堂(120名収容)は講演会・シンポジウム・国際会議などに、また別館1階4部屋および西館4階に4部屋あるセミナー室は各種ミーティング・勉強会などに幅広く利用されており、1年間の利用者は延べ34,430名でした。東館の会合施設には、庭園に面した

分割可能な地下大会議室の樺山愛輔／松本重治
ルームと岩崎小彌太記念ホールがあり、多種多
様な催し物の開催が可能です。大会議室とホー
ルを連動して利用する200名程度の講演会・国際
会議・学会会議・記念行事・コンサート・研
修・婚礼関連などのさまざまなご要望にお応え
して、延べ28,589名にご利用いただきました。

ティーラウンジ「ザ・ガーデン」は宿泊客の朝
食に始まり、気軽なランチ、ティータイムそし
てディナーと終日提供しており、延べ65,862名
にご利用いただきました。

レストラン「SAKURA」は会員、宿泊客、ゲス
トの方々のサロンとして活用され、延べ16,262

名にご利用いただきました。定番のプリフィッ
クス・ランチから季節に合わせて、夜桜フレン
チディナー・お花見弁当・クラシカルフレンチ
メニュー・秋を楽しむフレンチディナー・クリ
スマスディナー・おせちなどの企画を打ち出し、
特に、毎月入れ替わるプリフィックス・ランチ
メニューとディナーコースメニューは美味との
定評をいただき、四季折々の庭園の風情とあい
まって、好評を博しています。その結果、別館
を含む会合施設および料飲施設の総利用客数は、
延べ153,981名でした。

施設を会場とする懇親の催しも年間を通じて
主催し、恒例の春の「観桜会」、夏の「ガーデン・



ワインパーティー



ワインパーティー

ビアパーティー」、秋の「ワインパーティー」、そして年末の「クリスマス晩餐会」を行いました。観桜会(3月30日～31日、参加者延べ225名)では、樽酒の鏡開きを行い、ガーデン・ビアパーティー(7月28日、参加者174名)では、真夏の宵にテーブルを庭園に特設、ワインパーティー(11月16日、参加者142名)では、日程をボージョレ・ヌーボーの解禁日に合わせて新酒をご賞味いただきました。クリスマス晩餐会(12月23日～25日、参加者延べ253名)では、ロビーにて鳥居坂教会の聖歌隊による聖歌の合唱をお楽しみいただきました(24日のみ)。

Ⅵ. 財 政

国際文化会館の会計は、公益財団法人への移行に伴い新公益法人会計基準に基づき、正味財産増減計算書にてご報告します。従来からの主な変更点は、特別会計・一般会計の区分の撤廃、保有有価証券の評価損益の計上等です。

2017年度の一般正味財産増減の部における経常収益合計は989,459,064円、経常費用合計は949,402,105円で、特定資産評価益1,590,810円を調整後の当期経常増減額は41,647,769円でした。このため一般正味財産期首残高2,357,729,750円を加えた一般正味財産期末残高は2,399,377,519円となりました。また、指定正味財産増減の部における当期指定正味財産増減額は142,238円で、指定正味財産期首残高18,732,628円を加えた指定正味財産期末残高は18,874,866円となりました。

会員関係付表

(2018年3月31日現在)

個人会員国籍別統計

国／地域	計 2017年3月31日	新入会員 (+)	退会 (-)	死亡 (-)	会費滞納 (-)	計 2018年3月31日
オーストラリア	27	2	0	0	0	29
オーストリア	4	0	0	0	0	4
バングラデシュ	0	1	0	0	0	1
ベルギー	4	0	0	0	0	4
ブラジル	1	0	0	0	0	1
カナダ	32	4	0	0	0	36
中華人民共和国	3	0	0	0	0	3
チェコ	1	0	0	0	0	1
デンマーク	2	1	0	0	0	3
エクアドル	1	0	0	0	0	1
エリトリア	0	0	0	0	0	1**
フィンランド	3	0	0	0	0	3
フランス	11	1	0	0	0	12
ドイツ	29	0	0	0	0	29
香港	2	0	0	0	0	2
ハンガリー	1	0	0	0	0	1
インド	9	0	0	0	1	7*
インドネシア	3	0	0	0	0	3
アイルランド	6	0	1	0	0	5
イスラエル	2	0	0	0	0	2
イタリア	6	0	0	0	0	6
日本	2,058	137	42	29	4	2,118*
ケニア	1	0	0	0	0	1
韓国	19	4	1	0	0	22
マレーシア	4	0	0	1	0	3
ネパール	1	0	0	0	0	1

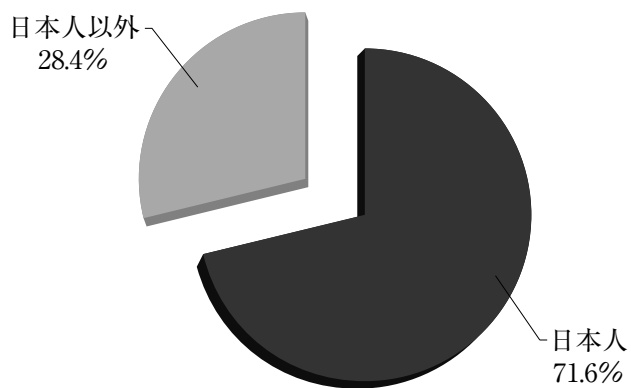
(次頁に続く)

オランダ	7	0	0	0	0	7
ニュージーランド	2	0	0	0	0	2
フィリピン	3	0	0	0	0	3
ポルトガル	1	0	0	0	0	1
ロシア	1	0	0	0	0	1
シンガポール	5	0	0	0	0	5
スペイン	1	0	0	0	0	1
スリランカ	0	1	0	0	0	1
スウェーデン	10	0	0	0	0	10
スイス	5	0	0	0	0	5
台湾	3	0	0	0	0	3
タイ	10	0	0	0	0	10
トルコ	4	0	0	0	0	4
イギリス	53	1	1	0	0	53
アメリカ	556	24	10	7	13	553*
ベトナム	1	0	0	0	0	1
日本人	2,058	137	42	29	4	2,118
日本人以外	834	39	13	8	14	841
合計	2,892	176	55	37	18	2,959

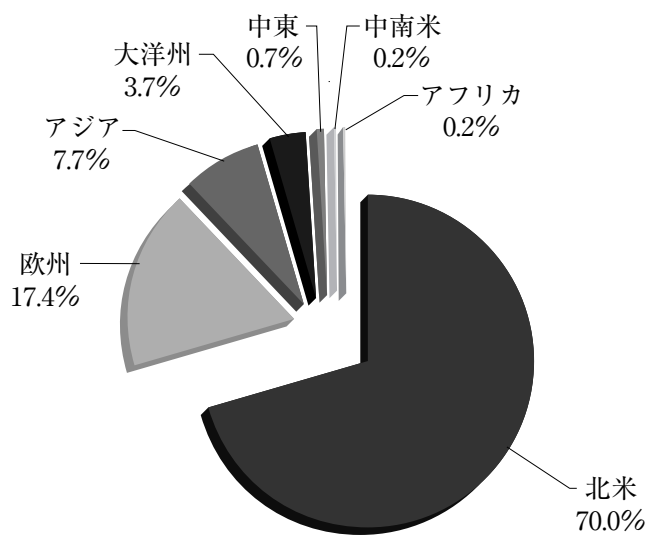
*国籍変更…日本→USA2名、インド→USA1名

**旧優待会員→個人会員1名

会 員 比 率



日本人会員比率



日本人以外地域別会員比率